

香川明善短大 ○秋山照子

目的 香川県下における近世・近代の食構造を古記録を資料として調査しており、今報では渡瀬家・仏事献立を取り上げる。仏事献立は食関係資料の少ない近世・近代では資料が比較的よくまとまって残っているもので、これにより地域、時代など系統的に庶民レベル(一部であるが)の食生活の実態を解明できると考えられる。

方法 渡瀬家に現存する仏事関係古記録中、仏事献立記載のある24冊・明治23年～昭和27年の約60年間から117献立を抽出、分類し、本報では主に献立構成を中心に検討する。又、前報までを併せて「仏事・献立パターン分布図」を作成し、地域の特徴をみる。

結果 (1) 献立構成は階級差が顕著で、対象毎の主な献立パターンは下記のようなものである。

前日	上分・中分	A + B + C パターン	※ A・飛時 = 麺類	B・茶漬 = 猪口・平・飯
	下分	A・B パターン	C・酒肴 = 酢物・組肴・和物・茶碗など	
後日	上分・中分	A + B + C パターン	※ A・正喰 = 皿・皿・変り飯	B・膳部 = 本膳・
	下分	B パターン	二の膳	C・酒肴 = 酢物・組肴・寿し・茶碗他

(2) 階級差は明治期の上下2区分から、大正期では上中下3区分と細分化され、昭和27年には「膳符ハ上下ノ区別セズ一律ニシタリ」となって次第に廃止の傾向である。(3) 献立構成の格差は対象、仏事の軽重など内的要因と共に戦争など外的要因(社会的要因)によるのがみられた。(4) 献立構成は時代の進行と共に昭和11年まではわずかであるが増加傾向、定型化傾向を示す。(5) 「仏事・献立パターン分布図」から近代における仏事の献立構成は、一部地域を除いて名称など細部は異なるものの全体的に類似項が多いことが認められた。